

仏様のおはなし新シリーズ第103集「共感」

かなり昔のことになるのでしょうか。人間が集団で生活を始めるようになつた頃、他人に共感する能力を身につけたそうです。その一つの表れとして、赤ん坊を他人に預けて世話をもらうということも始まつたそうです。そのことをある報道で聞いたとき、驚きにも近い感情に支配されました。

そこにおいては、淋しそうにしている仲間に「一緒にいるよ」と合図を発することもあつたでしょう。自身、他人のしあわせに思わず貴泣きする経験がありますが、そのような感情が私のなかに、遠い昔から用意されていましたというのでしょう。

想像もつかないくらい遠い過去に阿弥陀という仏がお出ましになりました。すべてのいのちあるものを救うという願いを発された仏です。そして今も阿弥陀仏は私どものうえにはたらいてくださっています。その願いは四十八あり、その最初に、地獄・餓鬼・畜生が無いようにとの願いがあります。

地獄は孤立、餓鬼は渴き、畜生は従属と表現してみたいと思います。人々が、孤立の淋しさに追いやられ、渴きの苦しみに苛(さいな)まれ、従属に怯(おび)えて暮らしている現実に目を向けてくださいたと受け止めたいことです。そのようなことが無いようにとの願いです。

同時に、他者を撥ね退け、不足に苛立ちを募らせて他のものを奪い取り、他者を従属させることの無いようにとの願いでもあると受け止めます。それは、人間の罪深さを教えるものもあるのです。

この阿弥陀仏の願いをいただくとき、私の生き様はとすると、孤立する人に気づかず、個人的な欲に支配され、弱者に冷たく強者に阿(おもね)るものと知らされます。遠い昔から用意されていたはずの「共感」という感情を、私は一体何処に置いてしまつたのでしょうか。置いてきたところが何処かも分からずに生きている、底が見えないくらいの深い闇を抱えている存在なのでしょう。改めて、「共感」という言葉の深い中身を問いたいと思います。

